サウジアラビア紅海沿岸ハウラー遺跡の考古学調査(2018)
―中世の港町とその後背地―

長谷川　奏　早稲田大学総合研究機構客員教授
徳永　里砂　アラブ・イスラーム学院研究員、金沢大学国際資源学研究センター客員准教授
惠多谷雅弘　東海大学情報技術センター主任技師・事務長

Archaeological Research at al-Hawra' on the Red Sea Coast of Saudi Arabia: Medieval Port Site and its Hinterland

HASEGAWA, So　Visiting Professor, Comprehensive Research Organization, Waseda University
TOKUNAGA, Risa　Researcher, Arabic Islamic Institute in Tokyo & Visiting Associate Professor, Kanazawa University
ETAYA, Masahiro　Chief Engineer, Administrator, Tokai University Research & Information Center

はじめに

本報告は、サウジアラビア考古局(Saudi Commission for Tourism and National Heritage、以下SCTHと略記)からの打診に応じて行ったハウラー(Hawra')遺跡調査の概査(2018/3/2～14)の成果を記すものである。当遺跡は歴史時代に港湾都市として重要な位置を占めていたと考えられるため、紅海沿岸に位置する港の痕跡だけではなく、後背部を形成する山間部の巡礼路(al-Madina～al-'Ula～Tayma')との総合考察が求められる。そこで本稿では、研究対象のハウラー遺跡と、その比較調査としての近隣の二つの港湾遺跡に対する観察所見を述べた上で、後背地に残るクーファ書体を中心とする初期イスラーム時代の岩壁碑文の調査を加えた概査の大要を記す。

1. 遺跡調査の概要

ハウラー遺跡は、紅海沿岸の主要都市ウムルジュの北約10 kmに位置する(**図1、3**)。遺跡は南北に2 km程度、東西に0.5～1.0 km程度の広がりを持つ。ハウラー遺跡は、歴史文献によると、ウマイヤ朝～アッバース朝～ファーティマ朝という初期イスラーム時代を通じて、エジプトからの巡礼路の中で重要な位置を占めていたことが知られているが、考古学的には基本的に未調査である。このたびの調査では、リモートセンシングによる遺跡探査の手法を活用しながら、微地形観察と遺構・遺物の分布観察を進めた。具体的には、Landsat8、ALOS2、CORONA、WorldView-2などの多衛星データの画像特徴量、およびWorldView-2のステレオ撮影データから作成したDSM(Digital Surface Model：数値地表モデル)から理解される地形情報(**図3**)を通して、ハウラー遺跡周辺の古環境理解を行い、それに基づいて選定した遺跡の有望地点や要確認地点を対象にグランド・トゥルースを行った結果、遺跡の可能性のある地点が確認できた。

これらの結果を総合し、1980年代の試掘調査では部分的な遺構の分布しか報じられてこなかった遺跡を、港域と集落域に分化できる見込みを得ることができた(**図2**)。港域とその周辺では、船泊めと推測される縄擦痕を有する火山岩ブロックが分布しており(**図4**)、桟橋の痕跡と思われる石積み遺構もみられた(**図5**)。1980年代の試掘エリアは、その後30年近い経年で多くが失われているが、作成された分布図を利用すれば、南丘陵では、東西300 m、南北150 m、標高6～8 mのエリア内に、モスクと住居が一体となった空間(House1-3 areas＋Mosque area)の復元が可能となり、発掘調査によって、ここから9～12世紀を中心とした生活雑器(陶器、陶磁器、土器、ランプ等)、装飾品、道具等の集中的出土が見込まれる。一方港域は、建造物の痕跡はまばらであるが、部分的に桟橋とも推測されるブロック列がみられた。この地区からは、大型土器(多くはアンフォラ、甕、水壺)やガラス片が多く取り上げられると思われ、この出土傾向の差異が大きな特色となろう。

2. 遺構と遺物

ハウラー遺跡の南丘陵に集中的に分布する遺構の多くは、黒色の火山岩ブロックや白色の珊瑚ブロックを用いた壁体の基部である。上部構造は既に失われているが、壁体の幅は、外壁と思われるものは0.7〜0.9 m程度、間仕切りの内壁と推測されるものは0.4〜0.5 m程度の壁厚保の異なりもみられ(**図6**)、残された基礎部からは、いくつかの住居が復元されていくであろう。またこれらの住居の部屋には、炉と推測される遺構や、セメントが用いられた床面らしき痕跡がみられるものもある。1980年代の試掘でみつかったモスク(**図7**)からは、方形の煉瓦タイルで舗装された床面やクーファ書体の碑文と植物文様を有する建材等)がみつかっている(Al-Ghabban 211-215)。

地表面に分布する遺物に関しては、ハウラー遺跡の地表面に分布する生活雑器の殆どは、初期イスラーム時代(9〜11世紀)に位置づけられるが、これに先行するローマ時代の層の存在が遺物から窺うことができるかどうかが、一つの大きな着目点となる。これに関して、1980年代に行われた調査では、ナバテア土器と推測される破片が観察されることが述べられており、我々の調査では港周辺で取り上げられた薄く良質の胎土で作られた赤色光沢土器(壺形になると思われる)が、唯一、それに当該する可能性をもつが、関連は明らかではない。一方、初期イスラーム時代の陶器は多く分布しており、それらの多くが、アルカリ釉と推測される青釉・緑釉(**図8**)・白釉等の鉢や皿で、イラク等の強い影響下にあったことが窺われる。その中でも、独特の幾何学模様を黒色・暗紫色の顔料で描き、その上から施釉する陶器(**図9**)は、この地域の特産品であったようだ。ヨルダンのアカバからアレクサンドリアにかけては、この技法が広く共有されたことが欧米の調査隊から報じられているが(Whitcomb 173-175)、これは8世紀の終わりから9世紀の初め頃に、エジプトから「カリフの運河」を通ってヒジャーズまで運ばれる穀物輸送が重要な輸送ルートとして機能していた時代背景があったことを示唆する資料と考えられる。

3. 碑文調査の概要

初期イスラーム時代の文献史料の記述では、ハウラーという地名はイスラーム以前より存在し、当時も現在と同様ジュハイナ族のテリトリーであったとされている。しかし、7世紀前半の文献に、ハウラーの名前は見られず、この辺りはイース(ウムルジュの東約85 km)の海岸部と認識されている。ハウラーがエジプト沿岸巡礼路上の町の一つとして頭角をあらわすのは9世紀以降のことで、内陸のワーディー・アルクラーの諸都市、さらにはハイバルの港と見なされることもあった。エジプト沿岸巡礼路の道筋については文献史料が豊富だが、主要巡礼路ではないハウラーと内陸都市を結ぶルートは、グラフィティの分布調査によって明らかにしていく必要がある。

上記の事情を踏まえ、今期調査では、ウムルジュの郷土史家や住民からの情報を基に、碑文調査を開始し、ウムルジュの東約40 km地点で8点の初期イスラーム時代のアラビア文字グラフィティ、その他2カ所でペトログリフを登録した(**図3**)。グラフィティが発見された地点はウムルジュとイースを結ぶ幹線道路から北に逸れてヌワイバァへと続くワーディーにある。これらの碑文は、書体や文面から8〜9世紀に位置づけられる。文面は、祈願文や信仰告白が中心で、8点中7点が「慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において」の文言に始まり(**図10**)、この文言を含まない1点のみが、他よりも比較的古い書体で刻まれている(**図11**)。また、ハウラーへと流れるワーディー・シミンの上流の2地点では、ラクダ、騎馬人物(またはロバに乗る人物)などのペトログリフが発見されたが、いずれもグラフィティを伴わず、年代特定は難しい。

ハウラー遺跡の後背地の山々の岩質は刻文に不向きなものが多く、ルートの特定は困難を極めるが、今後も聞き取り調査を継続し、グラフィティの所在を明らかにしていきたい。

おわりに

サウジアラビアでは、国家開発計画サウジ・ビジョン2030の一環として、ヒジャーズ地域に含まれる紅海沿岸のワジュフ〜ウムルジュ間も、同国の重要な開発対象になっており、150〜200 km程度を測る同地域間には50の島嶼が含まれていて、観光開発の対象になっているという。現在は、紅海沿岸の港やその周囲に形成されたハウラー遺跡、さらにその後背地を形成する山間地に、貴重な人間活動の痕跡が多く保存されているのは、おそらく中東の中でも群を抜いていると思われる。しかし、同時に、今後到来する開発の波で、それらの貴重な遺産が失われていく危機と背中合わせであり、それへの対応が喫緊な課題となっていることを意味する。そのためには、考古行政に関わる機関だ

けではなく、地域行政のさまざまな部署との連携も視野に入れていく必要がある。ハウラー遺跡では、港部分と居住域との分離が可能であるという見通しが得られたため、次回の調査では、まずはそのうち、居住域のクリーニングを進める手順で調査が行われ、後背部の碑文調査の成果と総合して、遺跡形成史の全体像を見通す試みを行う予定である。

図 1　研究対象地域の位置

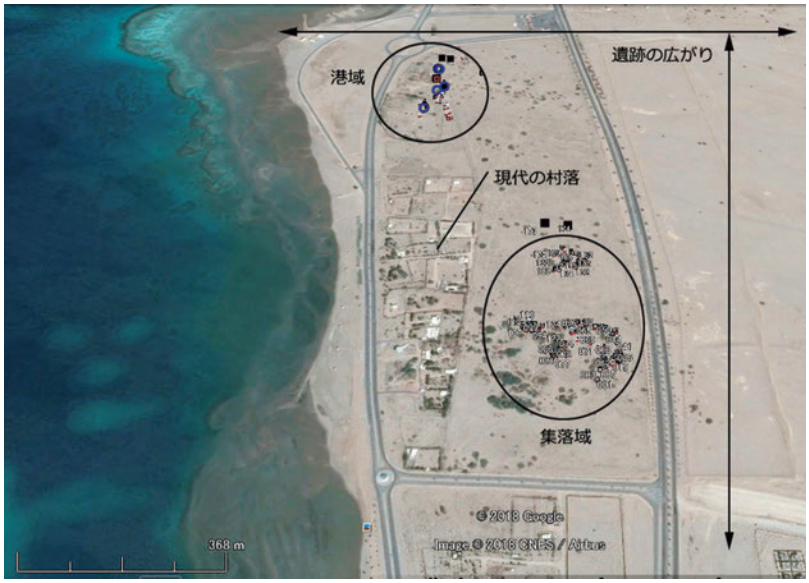

図 2　ハウラー遺跡の港域と集落域

図 3　Landsat8 号 OLI モザイク画像(2017/10/21　2016/11/21　2014/10/31)東海大学情報技術センター

図4　近現代まで利用された港の痕跡

図5　桟橋の痕跡と思われる石積み遺構

図6　住居の壁体基礎部の遺構

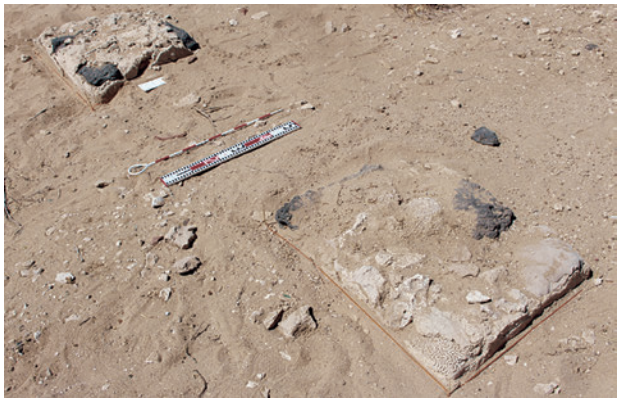

図7　モスクの柱基礎部の遺構

図8　壺形の緑釉陶器（把手付き）

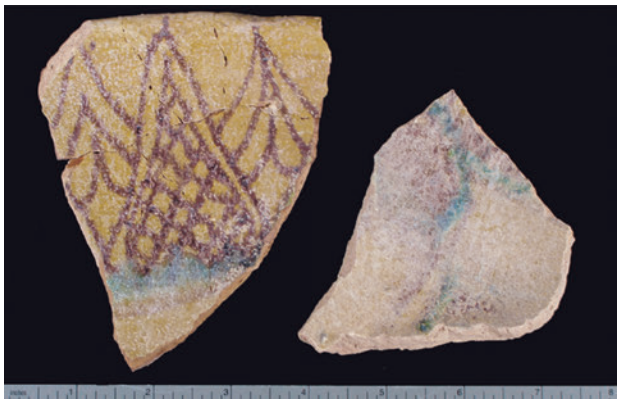

図9　下地に彩文を施した鉢型の黄釉陶器

図10　ヌワイバァ地区のグラフィティ（祈願文）

図11　ヌワイバァ地区のグラフィティ（信仰告白）

■参考文献

・Al-Ghabbân, Alî Ibrâhîm 2011: *Les deux routes syrienne et égyptienne de pèlerinage au nord-ouest de l'Arabie Saoudite*, 2 vols, Le Caire.
・Pedersen, R. K. 2015: "A preliminary Report on a Coastal and Underwater Survey in the Area of Jeddah, Saudi Arabia" *American Journal of Archaeology*, vol.119, Number 1, 125–136.
・Power,T. 2012: *The Red Sea from Byzantium to the Caliphate AD 500–1000*, Cairo.
・Whitcomb, D. 1989: "Coptic Glazed Ceramics from the Excavations at Aqaba, Jordan" *Journal of American Research Center in Egypt*, vol.26, pp.167–182.